

## 河川書の探求(9)

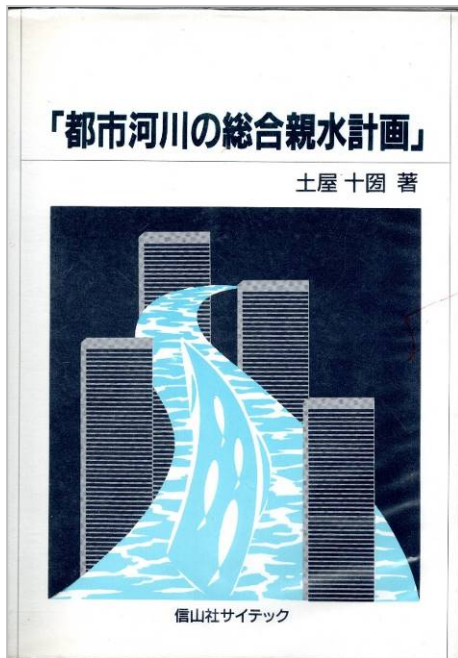
### 親水空間論・河川再生論

古賀邦雄・古賀河川図書館 (JRRN 会員)

#### 1. 親水河川空間論

河川の機能として治水機能、利水機能、親水機能を持っている。土屋十囀著『都市河川の総合親水計画』(信山社サイテック・1999年)では、親水性について、次のように定義する。

「親水性とは水辺環境において文字どおり水に親しむことをいい、水がもつ物理的、化学的な諸作用を通じて、人間の知覚作用によって与えられる意識及びその事像をいい、アメニティの一部を構成する概念」とした。



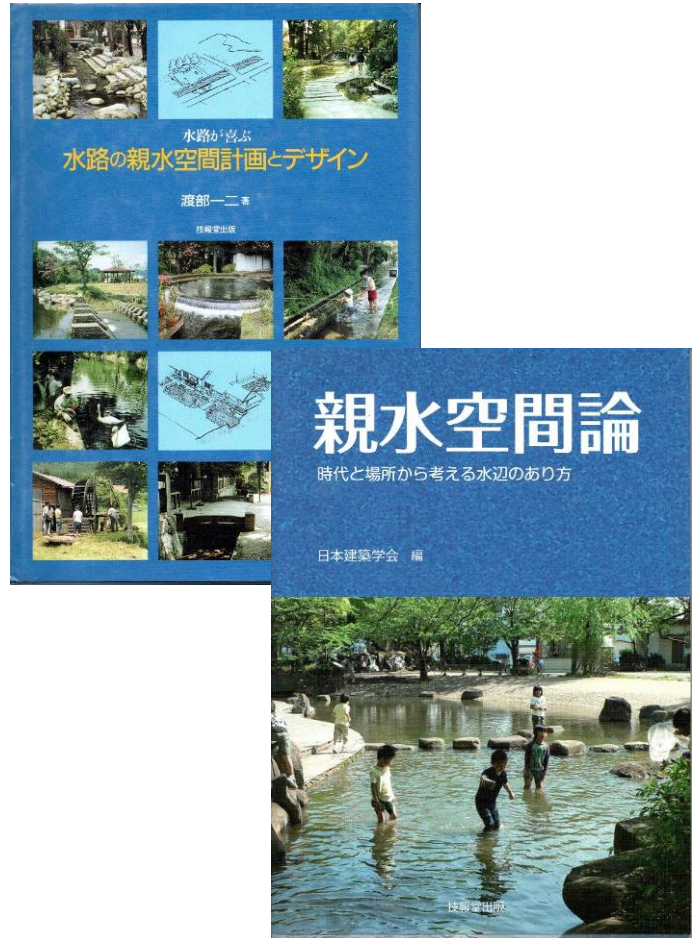
その河川における総合的な親水性を構成する要素を次の4点の議論を展開する。

- ①さわやかで豊かな水の流れ……………(流水形態)
- ②いきものの存在する流れ……………(生態環境維持)
- ③きれいな水の流れ……………(良好な水質保全)
- ④美しい河道のデザイン……………(景観設計)

親水機能として、水と周辺の生物などに接する心理的満足や水遊び、住民の憩い、コミュニケーションの場、景観などを掲げ潤いのある水辺空間を追求する。

1990(平成 2)年農林水産省が推進する「水環境整備事業」に鑑み、水路における親水空間論を捉えた渡部一二著『水路が喜ぶ水路の親水空間計画とデザイン』(技報堂出版・1996)がある。実際に、札幌市の創成川、福島県の大内宿の水路、熊谷市の星川、郡上八幡の水路、三島市の源兵

衛川、黒磯市の巻川用水が並ぶ。特に、大内宿の道沿いの、近くの山から流れくる爽やかな水路の清かな流れに、旅人の心がときめく。

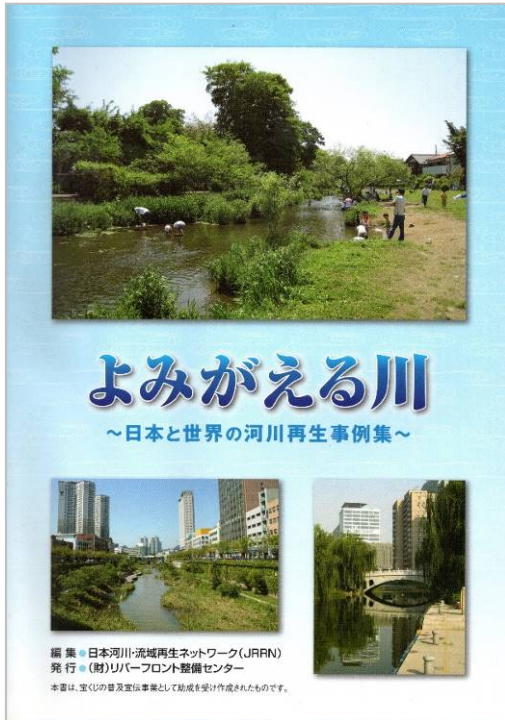


「都市生態学的視点による親水行動論」のサブタイトルのある畔柳昭雄・渡邊秀俊共著『都市の水辺と人間行動』(共立出版・1999)は、都市化によって、身近な自然やオープンスペースが減少したことから、人々は潜在的に自然のふれあいを求める。ここに親水行動が生じる。こつう行動は、周辺から失われた自然環境を補完するものとして、水辺空間、親水空間が優先的に選択される。と分析する。畔柳昭雄・上山 肇著『みず・ひと・まち－親水まちづくり』(技報堂出版・2016)もある。

日本建築学会編『親水空間論－時代と場所から考える水辺の在り方－』(技報堂出版・2014)は、海の水辺事例として、広島県の厳島神社、青森の木野部海岸、河川の親水として京都の鴨川、湖沼の親水として、茨城県の古河総合公園等を掲げる。

## 2.河川再生事業論

河川再生事業については、日本河川・流域再生ネットワーク編『よみがえる川－日本と世界の河川再生事例集』(リバーフロント整備センター・2011)は、河川再生について、自然環境や生物を対象とした再生の取り組みと同時に、かわまちづくりで代表される景観・歴史・文化等の河川が有する地域の魅力を活かした街と水辺が融合した再生も含まれる。

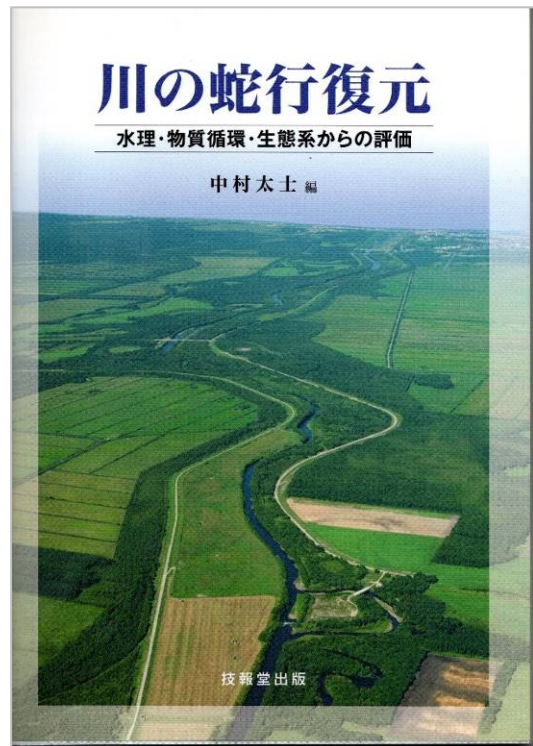
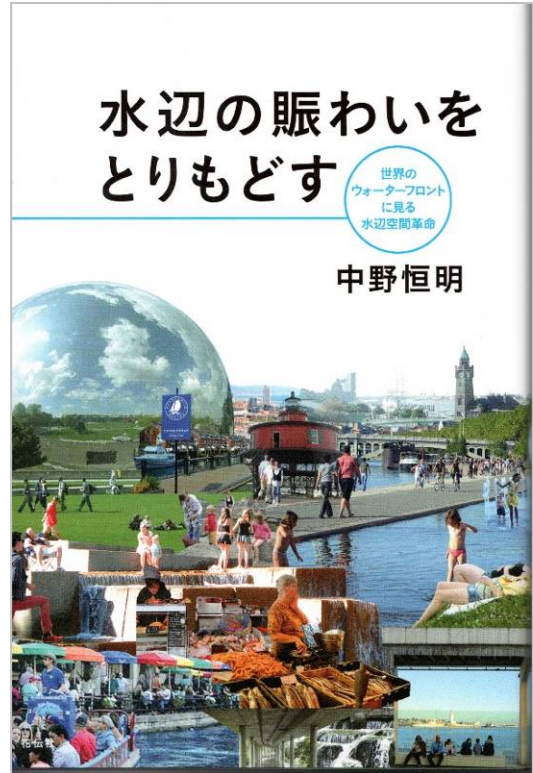


事例として、恵庭市茂漁川、酒田市小牧川、朝霞市黒目川、北京転河、台湾高雄市愛河、イギリス・テムズ川、同・スカーネ川、アメリカ・キシミー川、デンマーク・スキヤーン川、オーストラリア・クック川、イタリア・ゼロ川、オランダ・アイセル川等を捉えている。

リバーフロント整備センター編『川からの都市再生－世界の先進事例から－』(技報堂出版・2006)では、ソウルの川・清溪川の再生プロジェクト、中国・上海蘇州川の再生、イギリス・マージ川の河畔風景再生、フランス・セヌ川の高速道路の整備、アメリカ・ボストン地下化した道路空間の公共スペースとしての整備をあげている。

中野恒明著『水辺の賑わいをとりもどす－世界のウォーターフロントに見る水辺空間革命－』(花伝社・2018)は、空洞化した中心街をどうやって再生させるかを追求する。

ライン河畔プロムナードと世界最大規模の高水敷のオープンレストラン、アメリカ・ポートランド・ウィラメット川ウォーターフロント公園、デンマーク・コペンハーゲンのニューハウとハーバーフロントとハーバーフロント再生、スペイン・マラガ港のラ・ベルゴラ等の再生を通じ、水際の遊歩道の整備がそこを日常的に楽しむ市民の姿が見られるようになってくる。



渡辺豊博著『清流の街がよみがえった－地域力を結実・グランドワーク三島の挑戦－』(中央法規出版・2005)は、富士山麓の湧水で知られる三島市街を流れるドブ川と化した源兵衛川再生物語である。最後に、中村太土編『川の蛇行復元－水理・物質循環・生態系からの評価』(技報堂出版・2011)を挙げる。